

## 真宗教旨陽駁陰資辨

ト書きに掲載（楊文会再駁）

ト書きに掲載（楊文会再駁）

清金陵 楊文會仁山駁  
日本 香頂蓮船辨

《佛説接引往生。皆是顯他力之教。三輩九品皆仗佛力而得往生。若全仗自力。必至圓初住別初地。始能十方世界。隨意往生。故知淨土三經。勸進往生。全仗他力。而仍以自力為階降之差。我佛慈悲。所以誨人者至為圓妙。若以三輩九品為自力往生。則失經意矣》

《仏の接引往生を説くは、皆な是れ他力を顯すの教なり。三輩九品は皆な仏力に仗りて、往生を得るなり。若し全て自力に仗らば、必ず円の初住、別の初地に至りて、始て能く十方世界に隨意往生す。故に知りぬ、淨土の三經、往生を勸進するは、全て他力に仗る。而も仍ほ自力を以て階降の差を為すなり。我が仏の慈悲、人に誨する所以は、至りて円妙と為す。若し三輩九品を以て自力往生と為せば、則ち經意を失せんや》

○仁者曰

近時泰西各國。辨理庶務。日求進益。總不以成法為足。貴宗廣佈佛教。勢將遍于地球。伏願參酌損益。駕近古而上之。故不憚繁言。陽似辨駁。陰實資助。祈大雅鑒之。

○仁者曰はく。

近時、泰西<sup>①</sup>の各国の庶務を弁理すること、日に進益を求め、總じて成法を以て、足れりと為さず。貴宗は広く仏教を布し、勢い將に地球に遍せんとす。伏して願くば、參酌損益し、近古を駕して之に上らんことを。故に繁言を憚らず。陽は弁駁に似る。陰は實を資助す。祈らくは大雅に之を鑑みたまはらんことを。

(闡教編『評真宗教』<sup>1</sup>)

極樂淨土由彌陀願力所成。彌陀既發大願。勤修聖道方得圓滿。經云住空無相無願之法、無作無起觀法如化。此即聖道之極則也。以聖道修成本願。若云捨聖道則是違本願矣。因果相違豈得往生經云深信因果不謗大乘良有以也。以淨土爲入聖道之門。生淨土後則一切聖道。圓修圓証若在初修時唱言捨聖道、便是違背淨土宗旨矣。淨土門以三經一論爲依切須體究經論意旨方名如來真子也。

○辨曰

歐米各國之所以致其富強。據其君臣深信宗教。冠婚葬祭必依宗教。兵隊軍艦必置教師。故見死如生。見死如生(原注―四字恐衍)。是所以致其富強也。

聞貴國黃衣派挾天威而恣尊大。毫無學問之志。其青衣各派。乃甘卑屈。而視國家之興敗如秦人於越人肥瘠。故政府亦處之度外。棄而不顧也。僧寶之處世。豈有如是薄情者哉。

貴君深信佛乘。為我真宗。竭其心力豈可不鳴謝哉。今得其陽駁之言。深感其厚意。是所以我輩之吐露赤心也。

(闡教編『評真宗教』<sup>2</sup>)

極樂淨土は弥陀の願力に由り所成す。弥陀は既に大願を發し、聖道を勤修して、方に円満を得る。經に云はく「空・無相・無願の法に住し、無作無起にして、法を化の如く觀ず」と。此れ即ち聖道の極則なり。聖道を以て本願を修成す。若し聖道を捨てると云はば、則ち是れ本願に違はんや。因果相違し、豈に往生を得んや。經に云はく「因果を深く信じ大乘を謗せず」と。良に以え有るなり。淨土を以て聖道に入る門と為す。淨土に生まれた後、則ち一切の聖道を円に修し、円に証す。若し修時の初めに在りて、聖道を捨てると唱言せば、便ち是れ淨土の宗旨に違背せんや。淨土門は、三經一論を以て依と為し、切に須く經論の意旨を体究すべし。方に如來の真子と名づくなり。

弁じて曰はく。

《歐米各國の其の富強を致す所以は、其の君臣の深く宗教を信するに依る。冠婚葬祭は必ず宗教に依り、兵隊軍艦は必ず教師を置く。故に死を見ること生の如し。死を見ること生の如し(原注―四字は恐らく衍なり)。是れ其の富強を致す所以なり》<sup>5</sup> 聞くに、貴國の黃衣派<sup>6</sup>は天威を狹して尊大を恣にし、毫も學問の志し無し。其の青衣の各派<sup>7</sup>は、乃ち卑屈を甘じて國家の興敗を視ること、秦人の越人の肥瘠<sup>8</sup>に於けるが如し。故に政府も亦た之を度外に処き、棄して顧みざるなり。《僧寶の世に処するに、豈に是くの如き薄情なる者有らんや。》<sup>9</sup>

貴君は深く仏乘を信じ、我が真宗の為に其の心力を竭くす。豈に鳴謝せざるべけんや。今其の陽駁の言を得て、深く其の厚意に感ず。是れ我輩の赤心を吐露する所以なり。

(楊文会再駁)

(楊文会再駁)

僧俗二衆、佛有遺規、僧則守出家律儀、不干世務、俗則依在家道理、致君澤民、二者不相濫也。

僧俗二衆、仏に遺規有り。僧は則ち出家の律儀を守り、世務に干せざるなり。俗は則ち在家の道理に依り、君を致し民を沢し、二者相濫せざるなり。

○仁者曰

○仁者曰はく。

貴宗來支那宏教。實為末法津梁。因檢得十餘年前所獲真宗教旨一卷。悉心研究。覺與經意不合處頗多。遂參末議。(註行問)以備芻蕘之採。鄙人直心論道。不避忌諱。所謂箇中人方談箇中事也。

貴宗は支那に來り教を宏む。實に末法の津梁と為る。因て十余年前、獲る所の真宗教旨一卷を検し得て、心を悉くし研究す。經意と合せざる処頗だ多きを覺り、遂に末議に參ず。以て芻蕘すうじょうの採10に備ふ。鄙人、直心に道を論じ、忌諱を避けず。所謂、箇中の人、方に箇中の事を談ずるなり。

○辨曰

弁じて曰はく。

箇中人談箇中事。餘情戀戀。足知貴君之厚情。至與經意不合之言。余輩亦直心論道。不避忌諱也。請諒之。

箇中の人、箇中の事を談ず。余情恋恋として、貴君の厚情を知るに足れり。經意と合せざるの言に至りては、余輩も亦た直心に道を論じて忌諱を避けず。請ふ、之を諒せよ。

○仁者曰

○仁者曰はく。

末法時人。業重障深。修習聖道難進易退。盡人而知之矣。但形諸語言文字。祇可隱含。不可顯露。若直言捨則違聖教。違聖教便障往生矣。

末法の時の人は、業重く障深くして、聖道を修習するに進み難く退き易し。人を尽して之れを知れり。但の諸れを語言文字に形す。祇に隱含にすべし。顯露にすべからず。若し直ちに言ひ捨つれば、則ち聖教に違す。聖教に違すれば、便ち往生を障ふ。

○辨曰

弁じて曰はく。

本宗之視一代教。有二門。一差別門。二平等門。差別門則聖道門之外。別立淨土門。平等門則淨土門之外。別無聖道門。一代八萬四千門盡為念佛之門戶也。

此土入聖為聖道門。淨土往生為淨土門。此土之成佛。與他土之成佛。天淵夔別。以此差別門。施化内外。勢不得不捨聖道而入淨土也。末法重障。此土入聖則難。淨土得生則易。本宗捨其難而就其易也。斷斷乎顯露之言語文字據老婆心之切也。若葬之曖昧模糊之中。末代幼稚。喪失其方針矣。

○仁者曰

貴宗于佛教門中。專重淨土。于淨土門中。專重他力信心。可謂簡而又簡捷而又捷矣。

(闡教編『評真宗教旨』)

此法在家二衆行之相宜。出家五衆自有清規。若一概效之則住世僧寶斷矣。末法万年儀表不可廢也。

○辨曰

貴君既知之。何用下陽駁。然此文表面褒之而至下刺衝

訳註『真宗教旨陽駁陰資弁』

本宗の一代教を視るに二門有り。一には差別門。二には平等門。差別門は則ち聖道門の外に別に淨土門を立つ。平等門は則ち淨土門の外に別に聖道門無し。一代八万四千の門は、尽く念仏の門戸と為すなり。

此土入聖を聖道門と為す。淨土往生を淨土門と為す。此土の成仏と他土の成仏と、天淵夔に別なり。この差別門を以て、化を内外に施す。勢ひ聖道を捨てて淨土に入らざるを得ず。末法重障なれば、此土入聖は則ち難し。淨土得生は則ち易し。本宗は其の難を捨てて其の易に就くなり。斷斷乎、顯露の言語文字は、老婆心の切なるに依るなり。若し之れを曖昧模糊の中に葬らば、末代幼稚にして、其の方針を喪失せん。

○仁者曰はく。

貴宗は仏教門の中において専ら淨土を重んじ、淨土門の中において専ら他力信心を重んず。簡にして又簡、捷にして又捷なりと謂ふべし。

(闡教編『評真宗教旨』)

此法在家の二衆は之を行じ相宜す。出家の五衆は自ら清規有り。若し一概に之を效せば、則ち世に住する僧寶は断ず。末法の万年の儀を表せば廃すべからざるなり。

弁じて曰はく。

貴君既に之れを知れり。何ぞ下の陽駁を用るや。然れども此の文の表面は之を褒じて、

皮肉。吾輩亦不得不舉骨髓而示貴君也。

下に至りて皮肉を刺衝す。吾輩も亦た骨髓を挙て貴君に示さざるを得ざるなり。

〔闡教編『評真宗教旨』〕

〔闡教編『評真宗教旨』〕

聖道為十方刹土解脱之門徑。生西方浄土之人亦由聖道而証妙果。修諸行者若不念佛回向不得往生。

聖道は十方刹土を解脱の門徑と為す。西方浄土に生まるるの人も、聖道に由り妙果を証す。諸行を修する者は、若し念仏廻向せずんば、往生を得ず。

○仁者曰

○仁者曰はく。

龍樹說難行易行二道。是活法于聖道中。開出浄土一門。接引後學。此謂同中別也。利根于現生中。得念佛三昧。即證入聖道門。鈍根于往生後。花開見佛。亦證入聖道門。此謂別中同也。闡揚聖教者。須將死法說成活法。不可將活法說成死法。佛教命脉僅如懸絲可不懼哉。

龍樹の難行易行の二道を説くは、是れ法を聖道の中に活かし、浄土の一門を開出し、後學を接引す。此れを同中の別と謂ふなり。利根は現生の中において念佛三昧を得て、即ち聖道門に証入す。鈍根は往生の後において、花開けて仏を見たてまつり、亦た聖道門に証入す。此れを別中の同と謂ふなり。聖教を闡揚する者は、須く死法を將ちて説きて活法を成すべし。活法を將ちて説きて死法と成すべからず。仏教の命脈は僅かに懸糸の如く懼れざるべけんや。

○辨曰

弁じて曰はく。

龍樹之開難易二道。非難中開易也。非聖道中開浄土也。聖浄二門并々區別矣。天親之浄土論。正明浄土。而龍樹之易行品。傍明浄土耳。

龍樹の難易二道を開くは、難中の易を開くに非ざるなり。聖道の中に浄土を開くに非ざるなり。聖浄二門并々區別せり。天親の浄土論は正しく浄土を明かせり。而も龍樹の易行品は傍に浄土を明かすのみ。

(楊文会再駁)

不識佛法開合之妙、見聖道淨土、判然兩途不得不改變  
徑意以合於自宗也。

(楊文会再駁)

天親往生論、於依正莊嚴後、攝入一法句、明淨土不外  
乎聖道也、曇鸞釋之甚詳。

○辨曰

同中別者佛教中見二門也。別中同者二門雖異。其所證  
之真如一也。(原註―真如即是聖道。既知同證真如。奈  
何唱言捨聖道耶。)

○辨曰

佛法無死法。盡皆活法。若強以死活目之。與時機合者  
爲活法。不與時機合者爲死法。方今聖道之一門。不合時  
機。獨我真宗。何肉周妻。爲國家奔走。不啻說出離之法。  
併亦說忠君愛國之事。毫不剩坐深山(而照法性之餘力也。  
單依佛力而往生淨土耳。)

(楊文会再駁)

仏法開合の妙を識らずして、聖道と淨土を見らば、判然兩途とすれば、經意を改変し、  
以て自宗に合せざるを得ざるなり。

(楊文会再駁)

天親の往生論は依正莊嚴の後において、一法句に攝入し、淨土は聖道に外ならざるこ  
とを明かすなり。曇鸞之を釈すること甚詳なり。

弁じて曰はく

同中の別とは、仏教の中に二門を見るなり。別中の同とは、二門異なると雖も、其の  
所証の真如は一なり。《原註―真如は即ち是れ聖道なり。既に同じく真如を証すること  
を知れり。奈何ぞ、聖道を捨つと唱言するや。》<sup>12)</sup>

弁じて曰はく

《仏法に死法無し。尽く皆活法なり。若し強て死活を以て之れを目せば、時機と合する  
ものを活法と爲し、時機と合せざるものを死法と爲す》<sup>13)</sup>。方に今聖道の一門は時機に合  
せざるなり。独り我が真宗のみ、何肉周妻し、國家の爲に奔走す。啻に出離の法を説か  
ず。併して亦た忠君愛國の事を説き、毫として深山に坐して剩せず。<sup>14)</sup>《法性を照らす余  
力なり。単に仏力に依りて淨土に往生するのみ。》<sup>15)</sup>

(楊文会再駁)

悉達太子捨金輪王位、入山修道、為後人榜樣、我輩雖不能學、心常羨之、今知貴宗如是存心、所謂道不同不相為謀也。

○仁者曰

存上句。刪下句可免掃拂聖道之弊。

○辨曰

於淨土門中有二門。一諸行往生。二念佛往生。弥陀本願不取諸行。獨取念佛。故以念佛為宗。不許雜修諸行。教人者要其明明白白決不可插摸稜之言也。

(楊文会再駁)

四十八願普攝諸行、何云不取耶。

(念佛即是諸行中之一行。專修念佛、所謂一門深入。而以世俗事務、夾雜其間欲得往生不亦難矣)

○辨曰

(楊文会再駁)

悉達太子金輪王位を捨て、入山修道して後人の榜樣と為す。我輩は学能はざると雖も心は常に之を羨む。今貴宗是の如くの心の存するを知る。所謂道は不同不相を謀と為すなり。

○仁者曰はく。

上句を存し、下句を刪らば、聖道を掃拂するの弊を免るべし。

弁じて曰はく。

淨土門の中に於いて二門有り。一には諸行往生、二には念佛往生なり。弥陀の本願は諸行を取らずして独り念佛を取る。故に念佛を以て宗と為し、諸行を雜修するを許さず。教人は其の明明白白を要し、決して摸稜<sup>16</sup>の言を挿むべからざるなり。

(楊文会再駁)

四十八願は普く諸行を攝す。何ぞ不取と云ふや

《念佛は即ち是れ諸行の中の一行為なり。專修念佛は、所謂一門に深入し、而も世俗の事務を以て、其の間に夾雜す。往生を得んと欲するも、亦、難かしからずや。》<sup>17</sup>

弁じて曰はく。

本宗有二門。一學門。二行門。約學門則一切經可學也。不學一切經則不可解淨土之法門也。若約行門則單據念佛之一行。豈攘排一代佛教乎。貴君其體之。

(闡教編『評小栗栖陽駁陰資弁』)

(學與行兩不相干。則學成無用之學。闡教典須一一銷歸自性。方為有益。栖君之言以闡經為所學、而非所行。則與學行兩不相涉。所學即屬無益)  
《謹案此條評本末錄茲依手稿增入編者識》

(楊文会再駁)

不學下三十五字、恰合我意。

○仁者曰

道綽迫鷄入水之喩。為留形穢土之人而說。非為修聖道者說也。

○辨曰

道綽已引大集經。曰。我末法時中。億億衆生。起行修

訳註『真宗教旨陽駁陰資弁』

本宗に二門有り。一には學門、二には行門なり。學門に約せば則ち一切經を學ぶべきなり。一切經を學ばざれば則ち淨土の法門を解すべからず。若し行門に約せば、則ち單に念仏の一行に抛れ。豈に一代仏教を攘排せんや。貴君は其れ之れを体せよ。

(闡教編『評小栗栖陽駁陰資弁』<sup>18</sup>)

(學と行との兩は不相干なれば、則ち學は無用の學と成る。教典を闡し、須く一一銷として自性に歸すべし。方に有益と為すべし。栖君の言、經を闡するを以て所學と為し、而も所行に非ず。則ち學と行との兩相涉せず。所學は即ち無益に屬するなり)  
《謹んで案ずるに、此の條は、評本末錄なり。茲に手稿に依りて増入す。編者識》

(楊文会再駁)

不學の下三十五字は、恰も我が意に合するなり。

○仁者曰はく。

道綽の鷄を迫めて水に入れしむるの喩<sup>19</sup>、形を穢土に留むるの人の為に説く。聖道を修する者の為に説くに非ざるなり。

弁じて曰はく。

道綽已に大集經を引きて曰はく。「我れ末法の時の中、億億の衆生、行を起こし道を



道。未有一人得者。是瞭然示聖道之不可修也。貴君其味之。

○仁者曰

迫鷄入水即遭淹沒。未聞修聖道而墮落者。蓋聖道雖難速證。亦作淨土資糧。與彌陀因地同一修途。自然與果位光明相接也。

○辨曰

穢土成佛爲聖道門。正像之時可作此事。至末代則不可作此事。舍利弗六住尚逢乞眼。況末代下根。

聖道之行為淨土資糧。可矣。觀經序正二分說定散二善。是引聖道之機。而入於淨土之念佛也。流通可見。善導之判。皎然照人。

○仁者曰

專修淨土之語可說。不修聖道之語不可說。蓋淨土亦聖道無量門中之一門。修淨土即攝一切聖道入一門。所謂他力信心者廢自顯他也。不許自他相對。即成絕待圓融法門矣。剋實論之。信心者自心所起也。他力者自心所見之他力也。除却現前一念。復何有哉。

修すれど、未だ一人も得る者有らず。」<sup>20</sup>と。是れ瞭然として、聖道の修すべからざるを示すなり。貴君其れ是れを味へ。

○仁者曰はく。

鷄を迫めて水に入らしむるは、即ち淹沒するものに遭ふなり。未だ聖道を修して墮落する者を聞かず。蓋し聖道は速証し難しと雖も、亦た淨土の資糧と作す。弥陀の因地と同一の修途なれば、自然に果位の光明と相接せん。

弁じて曰はく。

穢土の成仏を聖道門と爲す。正像の時、此の事を作すべし。末代に至りては則ち此の事を作すべからず。舍利弗は六住にして尚ほ乞眼に逢ふ。況んや末代の下根をや。

聖道の行は淨土の資糧と爲る。可なり。觀經序正二分に定散の二善を説く。是れ聖道の機を引きて、淨土の念仏に入らしむるなり。流通を見るべし。<sup>21</sup>善導の判、皎然として人を照す。

○仁者曰はく。

「專修淨土」の語は説くべし。「不修聖道」の語は説くべからず。蓋し淨土も亦た是れ聖道の無量門中の一門なり。淨土を修すれば即ち一切聖道を攝し一門に入る。所謂、他力信心とは、自を廢し他を顯すなり。自他の相對を許さざれば、即ち絶待円融の法門と成す。實を剋して之れを論せば、信心なる者は、自心の起こす所なり。他力なるものは、自心所見の他力なり。現前の一念を除却せば、復た何か有らんや。

〔闡教編『評真早教旨』〕

〔闡教編『評真早教旨』〕

自他皆是假名。廢假名之自。兩立假名之他。妙有無方。以龜毛易兔角。幸勿執爲實法也。

自他は皆是れ仮名なり。仮名の自を廢し、仮の他を立つは、妙用無方なり。龜毛を以て兔角と易える。幸に執して実法と爲すこと勿れ。

○辨曰

貴君膏盲之病在此一段。一者不知聖道之外有淨土門。二者不知自力之外有他力也。

貴君の膏盲の病は、此の一仮に在り。一には聖道の外に淨土門有ることを知らず。二には自力の外に他力有ることを知らざるなり。

此土入聖爲聖道門。他土得生爲淨土門。歷々區別矣。不可一混也。聖道即淨土。何用往生十萬億之西哉。

此土入聖を聖道門と爲す。他土得生を淨土門と爲す。歷々と區別せり。一混すべからざるなり。聖道即淨土なれば、何んが十萬億の西に往生することを用ひんや。

〔楊文会再駁〕

〔楊文会再駁〕

栖君非但不知聖道、亦復不知淨土。大凡闡揚淨土者、須知淨土因何而成、既以大經爲真實。

栖君但だ聖道を知らざるに非ず、亦た復た淨土を知らざるなり。大凡、淨土を闡揚するものは、須く淨土は何に因つて成ずるかを知るべし。既に大經を以て真實と爲す。

豈不見法藏比丘白佛言、我發無上正覺之心。非菩提心而何、發大願。後修行文中、自行六波羅蜜、教人合行、經文彰彰、可考証。知弥陀淨土、皆因修行聖道而得成就、奈可定要捨聖道修行者爲邪定聚、生于化土、不修行者爲正定聚、生于報土。顛倒謬亂、莫此爲甚。豈日日持誦經文、循行數墨、全不解義耶。

豈に法藏比丘の仏に言してを白さく「我れ無上正覺の心を發す」<sup>(28)</sup> ことを見ざらんや。菩提心に非ざれば、何ぞ大願を發さんや。後の修行の文中に、「自ら六波羅蜜を行じ、人を教え行せ令む」<sup>(29)</sup> と、經文に彰彰なり。考証すべし。弥陀淨土は、皆な聖道を修行するに因つて成就することを得るを知れば、奈可ぞ定んで聖道を捨することを要とせんや。修行を判ずれば、邪定聚にして化土に生ずると爲すなり。修行せざる者は、正定聚にして、報土に生ずると爲す。顛倒謬亂なり。此を甚と爲すこと莫れ。豈に日に經文を持

誦すれども、行に循し墨を数ふ。全く解せざる義なりや。

弁じて曰はく。

本宗の絶待円融を談ずるに二途有り。一には弥陀の本願一乗の外に、大小顕密の法門無し。大小顕密の万徳は、皆な弥陀の名号の中に収まる。之れを絶待円融と謂ふなり。

二には二門異なると雖も、所証の真理は一なり。是れを絶待円融と為すなり。

本宗に自力他力の信を談ずるは、自心従り發起する者を自力の信と為す。仏力従り發起する者を、他力の信と為す。唯識宗は他心を以て自心と為すことを許さず。華天以上は、十界互具、生仏無碍を許すなり。真言宗は之れ加持を談ずる。本宗他力の信と酷肖せり。仏の三密は行者に加するを加と為す。行者の三業は仏の三密を持つるを持と為す。是れを我我入と謂ふなり。本宗は仏の三密を行者の三業に渉入するに非ざるなり。弥陀仏の信は行者の心中に入る。是れを他力の信と為すなり。衆生の心は水の如く、仏心は月影の如し。仏心の衆生に現するを他力の信と為す。此の道理を知れば、則ち現前の一念に仏心を得ることを知るのみ。

○仁者曰はく。

此の喩は確ならず。宜しく刪るべし。

弁じて曰はく。

貴君の膏盲の病は、聖浄二門を混淆するに在り。末法は聖道を以て仏果を取るべから

○辨曰

本宗談絶待円融有二途。一者弥陀本願一乗之外。無大小顕密之法門。大小顕密之万徳。皆収於弥陀名號中焉。

謂之絶待円融。二者二門雖異。所証之真理。一也。是為絶待円融也。

本宗談自力他力之信。從自心發起者為自力信。從佛力發起者為他力信。唯識宗不許以他心為自心也。華天以上許十界互具生佛無礙也。真言宗之談加持。與本宗他力信酷肖。佛之三密加行者為加。行者三業持佛三密為持。是謂我我入也。本宗非佛之三密涉入行者之三業也。弥陀佛之信入行者之心中。是為他力信也。衆生心如月。佛心如月影。佛心之現於衆生。為他力信。知此道理則知現前一念得佛心耳。

○仁者曰

此喩不確。宜刪。

○辨曰

貴君膏盲之病。在混淆聖浄二門也。末法不可以聖道取

佛果。道綽已明白示之。夏裘冬葛何誤之有。

○仁者曰

此章宜全刪。

○辨曰

四法三願本宗之元首也。命脉也。若刪之者是斷本宗之頭也。禰本宗之命脉也。或放逐本宗。而不許五洲之布教也。貴君之信佛而尚作此薄情殘酷之語。悲哉。

(楊文会再駁)

既以俗見測佛經。自然以俗見測人情。無怪乎作此粗弊語也。

○辨曰

各宗祖師之開宗。必有偉大之判。天台以五時八教。釋一代教。嘉祥以二藏三輪。釋一代教。賢首以五教十宗。釋一代教。慈恩以有空中三時。釋一代教。天台以法華為真實教。嘉祥以三論為通申論。賢首以華嚴為稱性本教。

ざることを、道綽已に明白に之を示せり。夏にして裘し冬にして葛す。何の誤りか之れ有らん。

○仁者曰はく。

此の章は宜しく全刪すべし。

弁じて曰はく。

四法三願は本宗の元首なり。命脉なり。若し之れを刪らば、是れ本宗の頭を断するなり。本宗の命脉を禰ふなり。或ひは本宗を放逐して、而も五洲の布教を許さざるなり。貴君の信仏にして、而も尚ほ此の薄情殘酷の語を作す。悲しきかな。

(楊文会再駁)

既に俗見を以て仏經を測かり、自然に俗見を以て人情を測かり、此の粗弊の語を作すことを怪しむこと無し。

弁じて曰はく。

各宗祖師の宗を開くに、必ず偉大の判有り。天台は五時八教を以て一代教を釈し、嘉祥は二藏三論を以て一代教を釈し、賢首は五教十宗を以て一代教を釈し、慈恩は有空中三時を以て一代教を釈す。天台は法華を以て真實教と為す。嘉祥は三論を以て通申の論と為す。賢首は華嚴を以て稱性本教と為す。慈恩は深密を以て真實了義教と為す。若し

慈恩以深密為真實了義教。若使彼等全刪此章則彼等肯之否。

本宗以二門之判。判一代教。曰聖道門。曰淨土門。於淨土門有二門。曰正明淨土教。曰傍明淨土教。於正明淨土教有二門。曰真實教曰方便教。真實教者。大無量壽經是也。方便教者觀無量壽經阿彌陀經是也。

(楊文会再駁)

從上諸師開宗判教、必將所依之經、全體透徹方能破立自由、縱橫無礙、未有將本宗之經意掩抑、令前後文意不相聯屬者、如貴宗以無量壽經為主、而此經中三輩往生之相、則判為自力、棄而不取、以致全經血脈不能貫通矣。

○辨曰

何故以大經為真實教。大經曰。欲拯群萌惠以真實之利。釋尊已以大經為真實教。本宗之判據之。釋迦佛出世之本意。單在說弥陀之本願例如天台以法華為本懷之經。

何以觀經小經。為帶方便之教。觀經說定散諸行。定散諸行非弥陀本願。以定散諸行。願生淨土是為方便。

彼等をして全て此の章を刪らしめば、則ち彼等は之れを肯するや否や。

本宗は二門の判を以て一代教を判ず。曰はく聖道門、曰はく淨土門なり。淨土門に於いて二門有り。曰はく正しく淨土教を明かす。曰はく傍に淨土教を明かす。正しく淨土教を明かすことに於いて二門有り。曰はく真實教、曰はく方便教。真實教とは、大無量壽經是れなり。方便教とは、觀無量壽經、阿彌陀經是れなり。

(楊文会再駁)

從上の諸師、宗を開きて判教せば、必ず所依の經を將て、全体透徹して、方に能く破立自由、縱橫無礙ならん。未だ本宗の經を將て任意掩抑して、前後の文意をして相聯屬せざらん者有らず。貴宗の如く無量壽經を以て主と為し、而も此の經中の三輩往生の相は、則ち判じて自力と為す。棄して而も取らず、以て全經の血脈と致すは、貫通には能はず。

弁じて曰はく。

何んが故に大經を以て真實教と為るや。大經に曰はく、「群萌を拯ひ惠むに真實の利を以てせんと欲してなり」と。釈尊已に大經を以て真實教と為す。本宗の判は是れに拠る。釈迦仏の出世の本意は、單に弥陀の本願を説くに在るのみ。例せば、天台は法華を以て本懷の經と為すが如し。

何んが觀經・小經を以て帶方便教と為るや。觀經は定散諸行を説けり。定散諸行は弥

小經以諸行為少善根。以念佛為大善根。然小經之念佛。以自力廻向之。自力廻向非本願之正意也。故為帶方便之教。故三經之中單取大經為真實也。

聖道諸教有教行證。淨土門亦有教行證。淨土門以大經為真實教。以弥陀名號為真實行。以三信為真實信。以必至滅度為真實證。

真實行出於第十七願。曰稱我名者。真實信出於第十八願。曰至心信樂欲生我國。真實證出於第十一願。曰必至滅度。

釋迦諸佛說大經。是為真實教。大經之中說本願名號。是為真實行。十方衆生聞之而信。是為真實信。未來必往生淨土。是為真實證。

願成就曰。聞其名號信心歡喜乃至一念即得往生住不退轉。其者真實教也。名號者真實行也。聞信者真實信也。住不退轉者現生正定。現生正定必至滅度。是為真實證。貴君虚心平氣。翫味此章。必得知我祖意之所在。

○仁者曰

生淨土者。皆入正定聚。絶無邪定及不定聚經有明文。處々可證。若以觀經所攝。判為邪定聚則是聚九州鉄鑄成

訳註『真宗教』陽駁陰資弁』

陀の本願に非ず。定散諸行を以て淨土に生ぜんと願ふ。是れを方便と為す。

小經は諸行を以て少善根と為す。念仏を以て大善根と為す。然れども小經の念仏は、自力を以て之れを回向す。自力の回向は本願の正意に非ざるなり。故に帶方便の教と為す。故に三經の中、単に大經を取りて真實と為るのみなり。

聖道の諸教に教行証有り。淨土門も亦た教行証有り。淨土門は大經を以て真實教と為す。弥陀名号を以て真實行と為す。三信を以て真實信と為す。必至滅度を以て真實証と為す。

真實行は第十七願より出でる。曰はく「稱我名者」なり。真實信は第十八願より出ずる。曰はく「至心信樂欲生我國」なり。真實証は第十一願より出ずる。曰はく「必至滅度」なり。

釈迦諸佛は大經を説く。是れを真實教と為す。大經の中に本願の名号を説く。是れを真實行と為す。十方衆生、之れを聞きて信ず。是れを真實信と為す。未來に必ず淨土に往生す。是れを真實証と為す。

願成就に曰はく、「聞其名号。信心歡喜。乃至一念。即得往生。住不退轉」と。「其」とは真實教なり。「名号」とは真實行なり。「聞」「信」とは真實信なり。「住不退轉」とは、現生正定・必至滅度なり。是れを真實証と為すなり。

貴君、虚心平氣にして、此の章を玩味せん。必ず我祖意の在る所を知ることを得ん。

○仁者曰はく。

淨土に生ずる者は、皆な正定聚に入る。絶て邪定及び不定聚無きこと、經に明文有り。処々に証すべし。若し觀經の所攝を以て、判じて邪定聚と為することは、則ち是れ九州

一大錯矣。

○辨曰

起信論以十信以前。為邪定聚。邪者三惡道也。以十信為不定聚。或進入初住。或退墮三惡。初住已上為正定聚。正者聖也。必進得聖果也。諸經論判三聚。不一也。

本宗之釋三聚。以順本願者為正。以不順本願者為邪。第十八不以諸行為往生之因。單以念佛為往生之因。善導曰。一心專念彌陀名號是名正定之業。順彼佛願故。順彼佛願。必得往生。是為正定聚。觀經定散諸行。不順佛願是為邪。以邪而願生。故為邪定聚也。

(楊文会再駁)

觀經是佛說、何云不順佛願。尊善導而慢釋迦、是何居心。

○辨曰

此邪之言。顯非本願之行耳。如天台之以小乘為邪見。小乘佛教。豈邪乎。望之圓教。得邪名耳。

の鉄を聚めて鑄て一大錯を成すものなり。

弁じて曰はく。

起信論は、十信以前を以て邪定聚と為す。邪とは、三惡道なり。十信を以て不定聚と為す。或ひは進て初住に入り、或ひは退て三惡に墮す。初住已上を正定聚と為す。正とは聖なり。必ず進て聖果を得るなり。諸經論の三聚を判すること、一ならざるなり。

本宗は之の三聚を釋するに、本願に順ずる者を以て正と為す。本願に順ぜざる者を以て邪と為す。第十八は諸行を以て往生の因と為さず。單に念佛を以て往生の因と為すのみ。善導曰はく、「一心に専ら彌陀名号を念ず。是れを正定の業と名づく。彼の仏願に順ずるが故に」と。彼の仏願に順じて、必ず往生を得る。是れを正定聚と為す。觀經の定散の諸行は、仏願に順ぜず。是れを邪と為す。邪を以て願生す。故に邪定聚と為すなり。

(楊文会再駁)

觀經は是れ仏說なり。何か仏願に順ぜざると云ふや。善導を尊び而も釋迦を慢るは、是れ何の居心や。

弁じて曰はく。

此の邪の言は、非本願の行を顯すのみ。天台の小乘を以て邪見と為るが如し。小乘は仏教なり。豈に邪ならんや。之れを円教に望んで、邪の名を得るのみ。本宗は單に念佛



本宗單以念佛為正。對此正得邪名耳。定散諸善豈三惡之因乎。

本宗之三聚。立之現生。得他力信。而行他力念佛。是為正定聚。以自力信而廻向諸行。是為邪定聚也。弥陀經之機。以自力而行念佛在正定邪定之中間。是為不定聚也。本宗立現生正定。據易行品也。曰。人能念是佛無量功德即時入必定是故我常念。此即時之言顯現生正定聚也。浄土無邪定不定。三尺之童知之。本宗三聚立之現生。咫尺黑暗。作九鉄鑄錯之大惡口。何不反省之甚。

#### (楊文会再駁)

若照此本判断、僅云大錯、猶不足以盡之。

○仁者曰

觀經被大機。最極圓頓。一生可證初住。位與善財龍女齊肩。于觀中蒙佛授記是也。何得判為機教俱漸。

○辨曰

一部觀經。以天台見之。心觀為宗。以善導見之。念佛

訳註『真宗教旨陽駁陰資弁』

を以て正と為す。此の正に対して邪の名を得るのみ。定散の諸善、豈に三惡の因ならんや。

本宗の三聚は、之れを現生に立つ。他力の信を得て、他力念仏を行ずる。是れを正定聚と為す。自力の信を以て諸行を廻向す。是れを邪定聚と為すなり。弥陀經の機は、自力を以て念仏を行ず。正定・邪定の中間に在り。是れを不定聚と為すなり。本宗の現生正定を立つるは、易行品に拠るなり。曰はく、「人能く是の仏の無量功德を念ずれば、即の時に必定に入る。是の故に我れ常に念ず」と。此の即の時の言は、現生正定聚を顯すなり。

浄土に邪定・不定無し。三尺の童、是れを知る。本宗の三聚は之の現生に立つ。咫尺黑暗、九鉄鑄錯の大惡口を作す。何んが反省せざるの甚しきや。

#### (楊文会再駁)

若し此の本に照らして判断せば、僅に大錯と云う。猶ほ以て之を尽くすに足らず。

○仁者曰はく。

觀經は大機に被す。最極円頓なり。一生初住を証すべし。位は、善財・竜女と肩を觀中に齊しくす。仏の授記を蒙るは是れなり。何ぞ判じて機教俱に漸と為すことを得んや。

弁じて曰はく。

一部の觀經は、天台を以て之れを見れば、心觀を宗と為す。善導を以て之れを見れば、



為宗。善導楷定古今。為上來雖說之判。是千古之確言。非衷之可撼者也。

淨土無九品。為真實報土。有九品為方便化土也。定散諸行非本願之行。以非本願之行願生淨土。必得九品之往生也。從此化土。一轉往生真土。故判觀經往生。為機教俱漸也。靜坐蒿目。仔細玩索。必覺妙味津々無盡焉。

(楊文会再駁)

不領佛經之本意、強作一解、以合於自宗苦心思索而得之、此所以津津有味也。

《非但釋迦教中無此道理、即十方三世一切諸佛教中、亦無此道理、用凡夫意想、捏造一法以駕於佛經之上、罪過彌天。》

○辨曰

大經以本願之行。願生報土。報土也者。一種真妙。而無九品之差別。往生即成佛。無一轉入報土迂廻也。是機教俱頓也。

念仏を宗と為す。善導は古今を楷定して、上來雖說の判を為す。是れ千古の確言なり。衷の撼すべきに非ざる者なり。

淨土の九品無きを真實報土と為す。九品有るを方便化土と為すなり。定散諸行は本願の行に非ず。本願の行に非ざるを以て、淨土に生ぜんことを願ず。必ず九品の往生を得るなり。此の化土従り一転して、真土に往生す。故に觀經の往生を判じて機教俱漸と為すなり。靜坐蒿目し、仔細を玩索せば、必ず妙味を覺する津々に尽くること無からん。

(楊文会再駁)

仏經の本意を領せず。強いて一解を作し、以て自宗に合せん。苦心思索して之を得る。此れ津津に味有る所以なり。

《但だ釈迦教中に此の道理無きに非ず。即ち十方三世の一切諸仏の教中に、亦た此の道理無し。凡夫の意想を用いて、一法を捏造し、以て仏經の上に駕すに、罪過は天に彌る。》<sup>(註)</sup>

弁じて曰はく。

大經は本願の行を以て、報土に生ぜんことを願ず。報土なる者は、一種真妙にして九品の差別無し。往生即ち成仏なり。一転して入報の迂廻無きなり。是れ機教俱に頓なり。

(楊文会再駁)

判他力信心者、駕於九品之上、往生即成佛 大經内無此義、猶如空拳誑小兒也。

○仁者曰

觀經從第三觀以去。皆是極樂妙境。無一非佛願力所成。不待隱取方為觀佛本願也。

○辨曰

善導以觀經為一体兩宗。兩宗者曰。觀佛為宗。亦念佛為宗。一體者曰。一心回願往生淨土為体。觀佛為宗是顯義。念佛為宗隱義也。顯說乎要門。隱說乎弘願。觀佛要門而念佛弘願也。

依觀佛三昧。見淨土依正。其所見之土。非報土是化土也。此化土亦願力所成。懈慢界可以見。依念佛三昧得往生。是報土非化土也。報土即是願力所成。非定善自力之可得往生焉。

(楊文会再駁)

他力信心者を判じて、九品の上に駕せしめ、往生即ち成仏とす。大經の内に此の義無し、猶ほ空拳の小兒を誑かんが如し。

○仁者曰はく。

觀經は第三觀從り以去、皆な是れ極樂の妙境なり。一として仏の願力の成ずる所に非ざるは無し。隱取を待たざるも方に仏の本願を觀ずと為す。

弁じて曰はく。

善導は觀經を以て一体兩宗と為す。兩宗とは曰はく、「觀佛を宗と為す。亦た念佛を宗と為す」と。一体とは曰はく、「一心に回願して淨土に往生するを体と為す」と。觀佛を宗と為すは是れ顯の義なり。念佛を宗と為すは隱の義なり。顯に要門を説き、隱に弘願を説く。觀佛は要門にして念佛は弘願なり。

觀佛三昧に依りて、淨土の依正を見るも、其所見の土は報土に非らずして是れ化土なり。此の化土も亦た願力の所成なり。懈慢界を以て見るべし。念佛三昧に依りて往生を得る。是れ報土にして化土に非ざるなり。報土は即ち是れ願力の所成なり。定善自力は之れ往生することを得るべきに非ざるなり。

(楊文会再駁)

釋迦佛何故説此懈慢界、教人往生、此真可謂謗佛謗法矣。

○辨曰

若以隱義會之。觀門所見之淨土。即為報土。

貴君之病。在不知弘願之外有定散要門也。又在不知念佛往生之外有觀佛往生也。以第十八願為弘願。以定散為要門。善導之釋皎然如日星。定散非本願。單念仏為弘願。善導流通照人顔色。

(楊文会再駁)

善導落筆時、不料後世人有此等執見也。

(善導施之是藥、後人執之成病)

○仁者曰

不但此等人非正修行。即終身修苦行。衲衣一食。科頭洗足。晝夜不眠。或處禪堂。或居山洞。自負修行。不肯虚心看經學道。但以除妄念為功。日久功深。一念不起。

(楊文会再駁)

釈迦仏、何故に此の懈慢界を説き、人をして往生せしむるか。此れ真に謗仏謗法と謂ふべしや。

弁じて曰はく。

若し隱の義を以て之を會せば、觀門所見の淨土は即ち報土と為す。

貴君の病は、弘願の外に定散の要門有ることを知らざるに在り。又、念仏往生の外に觀仏往生有ることを知らざるに在り。第十八願を以て弘願と為す。定散を以て要門と為す。<sup>(35)</sup>善導の積、皎然として日星の如し。定散は本願に非らざれば、單に念仏を弘願と為すのみ。善導の流通、人の顔色を照らす。

(楊文会再駁)

善導落筆の時、後世の人此等の執見有ることを料らざるなり。

《善導之を施すを是れ藥とし、後人は之に執するを病と成す》<sup>(36)</sup>

○仁者曰はく。

但だ此等の人、正に修行に非ざるのみならず。即ち終身に苦行を修し、衲衣一食、科頭し足を洗ふ。晝夜眠らず、或ひは禪堂に処し、或ひは山洞に居し、自ら修行を負ふ。肯ら虚心に看經學道せず。但だ妄念を除くを以て功と為す。日久しければ功深なり。一

便謂證道。殊不知恰成就一個無想外道。離佛法懸遠矣。功行淺者。命終之後。隨業輪轉。豈不哀哉。

○辨曰

貴君之言是也。支那僧大抵不學佛書。多見坐禪。或頭陀者。一念不生。誠為佛果。然至此一念不生之域難矣。(不至此域。而便謂至此域是為增上慢。去佛道遠矣。)若誠至此域者。非是無想外道。

功業淺者命終之後隨業輪轉。貴君之言是也自力之行。難得其成就道綽捨其難而取其易乘托弥陀佛力。而願往生。百即百生。貴君其取之。

(楊文会再駁)

判誠至一念不生者、非是無想外道、何其見之淺也、且不知無想定与滅盡定之差之毫厘、謬以千里。外道生無想天、自謂証大涅槃、不知報盡決定墮落也。

○仁者曰

自他皆是假名。廢假名之自。而立假名之他。妙用無方。

訳註『真宗教旨陽駁陰資弁』

念に起きずして、便ち道を証せりと謂ふ。殊に知らず。恰かも一個無想の外道と成就せり。仏法を離れ懸かに遠し。功行浅き者、命終の後、業に随ひて輪轉す。豈に哀しからずや。

弁じて曰はく

貴君の言は是なり。支那僧は大抵仏書を学ばず。多く見るに坐禪し、或ひは頭陀する者は一念不生し、誠に仏果と為す。然れども、此の一念不生の域に至るは難なりや。(此の域に至らずして、便ち此の域に至ると謂ふは、是れを増上慢と為す。仏道を去ること遠し。)若し誠に此の域に至る者は、是れ無想外道に非らざるなり。

功業浅き者は、命終の後、業に随ひて輪轉す。貴君の言は是なり。自力の行は、其の成就を得ること難し。道綽は其の難を捨てて其の易を取る。弥陀の仏力に乗托して往生を願ふ。百即百生、貴君は其れ之れを取れ。

(楊文会再駁)

誠に一念不生者に至らば、是の無想外道に非ざると判ず。何ら其の見の浅なりや。且つ無想定と滅盡定と之の毫厘に差え、謬するに千里を以てすることを知らず。外道は無想天に生じ、自ら大涅槃を証すと謂ふ。報尽決定して墮落することを知らざるなり。

○仁者曰はく。

自他は皆な是れ仮名なり。仮名の自を廢して、仮名の他を立つ。妙用にして無方なり。

以龜毛兔角。幸勿執為實法也。

○辨曰

末法凡夫不指方立相。則不能立其信也。有弥陀焉。有淨土焉。在十萬億之西。有七宝樹有八德水。因位永劫思惟修行。成就本願名號而攝取衆生。衆生信之。願生淨土未可從始容易入離言之妙境。

聖道諸教。則以自力進。以一切假名。為龜毛兔角。淨土門不然。五劫思惟非龜毛也。永劫修行非兔角也。本願名號攝取衆生。非龜毛兔角也。信此實法。乘托仏力。而往生淨土。始得詣無生之妙境。貴君勿混聖淨。幸甚。

○仁者曰

經云十方衆生至心信樂欲生我國。發此三心者。仍係自力也。若云從他力生。他力普遍平等。而衆生有信不信。豈非各由自力而生信乎倘不仗自力。全仗他力。則十方衆生皆應一時同生西方。目前何有四生六道流轉受苦哉。

○辨曰

貴君膏盲之病。在不知弥陀佛之願力焉。善導曰。乘彼

龜毛を以て兔角に易ふ。幸ひに執して實法と為すこと勿れ。

弁じて曰はく。

末法の凡夫は方を指し相を立てざれば、則ち其の信を立つること能はざるなり。弥陀有り。淨土有り。十萬億の西に在り。七宝樹有り。八德水有り。因位に永劫に思惟修行し、本願の名号を成就して衆生を撰取す。衆生之れを信じ、淨土に生ぜんことを願ふ。未だ始從り容易に離言の妙境に入るべからず。

聖道の諸教は、則ち自力を以て進む。一切の假名を以て龜毛兔角と為す。淨土門は然らず。五劫思惟は龜毛に非ざるなり。永劫修行は兔角に非らざるなり。本願名号は衆生を撰取す。龜毛兔角に非ざるなり。此の實法を信じ、仏力に乘托して淨土に往生し、始めて無生の妙境に詣ることを得る。貴君、聖淨を混すること勿ければ幸甚なり。

○仁者曰はく。

經に云はく、「十方衆生、心を至し信樂して我が國に生まれんと欲ふて」と。此の三心を発すと、仍ほ自力に係るなり。若し他力從り生ずと云はば、他力は普遍平等なるに、而も衆生に信と不信と有り。豈に各おの自力に由りて而も信を生ずるに非ざらんや。倘し自力に仗らずして、全く他力に仗らば、則ち十方衆生皆な応に一時に同じく西方に生ずべし。目前に何ぞ四生六道、流轉の受苦有らんや。

弁じて曰はく。

貴君は膏盲の病、弥陀仏の願力を知らざるに在り。善導曰はく。「彼の願力に乗じて」<sup>88)</sup>

願力。又曰。正由托仏願。又曰。大願業力為増上縁。我等往生。托此願力。不可以自力到焉。劣夫騎驢不能登空。陪輪王輿可飛行乎四天下。凡夫之往生。可乘托彌陀佛力。本宗釋第十八願之三心。為他力廻向之信。名號成於第十七願矣。衆生聽而信之。所聞之名號為能聞之信。大師曰。三心以名號為體。名號之入衆生心中。是為他力信也。得此信者。據宿善焉。宿善者三恒值佛也。過去修習念佛也。闕此宿善。則不能得信。貴君不知願力之廻向。不知宿善之有無。故妄為一時同生之難也。

(楊文会再駁)

此言成就我宗。宿善是自力所作、尊意只許前生之自力、不許此生之自力、誠不解其何義也

○仁者曰

能領佛勅者自心也。故仍從自心生。

と。又曰はく。「正しく仏願に託するに由る」と。又曰はく。「大願業力を増上縁と為す」と。我等の往生は、此の願力に託す。自力を以て到るべからず。劣夫は驢に騎るも空に登ること能はず。輪王の輿に陪せば四天下に飛行すべし。凡夫の往生は、弥陀の仏力に乘托すべし。

本宗は第十八願の三心を積して、他力回向の信と為す。名号は第十七願において成ず。衆生聴きて之れを信すれば、所聞の名号は能聞の信と為る。大師曰はく。「三心は名号を以て體と為す」と。名号は之れ衆生の心中に入る。是れを他力の信と為すなり。

此の信を得るとは、宿善に据るなり。宿善とは、三恒に仏に値へるなり。過去に念仏を修習するなり。此の宿善を闕けば、則ち信を得ること能わず。貴君は願力の回向を知らず、宿善の有無を知らず。故に妄りに一時同生の難を為すなり。

(楊文会再駁)

此の言我宗を成就す。宿善是れ自力の作す所なり。尊意は只前生の自力を許して、此の生の自力を許さず。誠に其の何の義かを解せざるなり。

○仁者曰はく。

能く仏勅を領するは自心なり。故に仍ほ自心従り生ずるなり。

(闡教編)『評真宗教旨』

(闡教編)『評真宗教旨』

所云不修者如禪宗之無修無證乎。抑如世俗之随波遂流乎。下文俗諦雜行非雜修而何。

云ふ所の修せざる者とは、禪宗の無修無証の如きか。抑も世俗の随波の如く遂流するか。下文は俗諦にして雜行雜修に非ずして而も何ん。

○辨曰

凡心如水。佛心如月。凡夫之心。不能生信如水之不能生月。佛心之入凡心而作信心。如月影之入水而與水一体。

弁じて曰はく。  
凡心は水の如し。仏心は月の如し。凡夫の心は、信を生ずること能はず。水の之れ月を生ずること能はざるが如し。仏心は之れ凡心に入りて信心と作る。月影の水に入りて水と一体なるが如し。

○仁者曰

九品之中。上品上生者。立刻見佛得忍受記以下諸品均無胎生之事。大經所説之胎生。以疑惑無智所感。与上品之超越中品之純篤。大相懸殊矣。

○仁者曰はく。

九品の中、上品上生のは、立刻に仏を見、忍を得て記を受く。以下の諸品、均く胎生の事無し。大經所説の胎生、疑惑無智を以て感ずる所なり。上品の超越、中品の純篤と、大に相の懸殊せり。

○辨曰

貴君不知以大經為真實教。以觀小二經。為帶方便之教。至筆々哭其窮途也。觀經九品之信。係自力之信。故上々品之信生上々品之淨土。乃至下々之信。生下々之淨土。觀經之九品。係淨土之化土。弥陀以方便之願。成此九品之化土。以應九品自力之機。此機往生此化土。而後一

弁じて曰はく。

貴君は大經を以て真實教と為し、觀小二經を以て帶方便の教と為すことを知らず。筆々、其の窮途に哭するに至るなり。觀經九品の信は、自力の信に係る。故に上々品の信は上々品の淨土に生ず。乃至、下々の信は下々の淨土に生ず。觀經の九品は、淨土の化土に係わる。弥陀は方便の願を以て、此の九品の化土を成し、以てまさに九品自力の機に応ずべし。此の機は此の化土に往生して、後に一転して一種

轉入一種真妙之報土也

真妙の報土に入るなり。

(楊文会再駁)

(楊文会再駁)

經中實無此語、或貴國所傳之本、與支那現行本不同歟。

經中、実に此の語無し。或は貴國所傳の本は、支那現行の本と同ぜざるか。

○辨曰

弁じて曰はく。

觀經不說胎生。是也。然善導曰。雖得往生。含華未出。或生邊界。或墮宮胎。則与大經胎生一般。

觀經の胎生を説かざるは是なり。然れば善導曰はく、「往生を得と雖も、華に含まれて未だ出でず。或ひは辺界に生じ、或ひは宮胎に墮す」と。則ち大經の胎生と一般なり。

本宗以自力之信。為屬疑部。蓋自力之信。知我力生淨土。而不知據佛力生淨土。是疑佛力也。故屬疑。龍樹曰。若人種善根。疑則華不開。信心清淨者。華開則見佛。疑者不了佛智也。信心清淨者明信佛智也。不了佛智自力信也。明信佛智他力信也。

本宗は自力の信を以て、疑の部に属すと為す。蓋し自力の信にして、我が力にて淨土に生ずることを知りて、而も仏力に拠りて淨土に生ずることを知らず。是れ仏力を疑ふなり。故に疑に属す。龍樹曰はく。「若し人善根を種ふるも、疑へば則ち華開けず。信心清淨なれば、華開けて則ち仏を見る」と。疑とは不了仏智なり。信心清淨とは、明信仏智なり。不了仏智は自力の信なり。明信仏智は他力の信なり。

○仁者曰

○仁者曰はく。

下文俗諦非雜行雜修而何。

下文の俗諦は雜修雜行に非らずして何なりや。

○辨曰

弁じて曰はく。

貴君毫不知雜行雜修為何物也。雜行正行之名出善導焉。以諸善萬行廻向之淨土。為往生之因。始得雜行雜修之名。

貴君は毫も雜行雜修の何物と為ることを知らず。雜行正行の名は、善導より出する。諸善万行を以て之れを淨土に回向して、往生の因と為す。始めて雜行雜修の名を得て、



不廻向之。則不得雜行雜修之名。五倫五常人生之所必由。而寸刻不可缺之。本宗不以之為往生之因也。如吃茶吃飯。豈以之為雜行雜修哉。

○仁者曰

倫常門是也。善世善尚不廢。何為偏廢出世善耶。

〔闡教編『評真宗教旨』〕

一切世善均在菩薩万行中撰。但能廻向浄土則成往生業。否則人天果報而已。發菩提心者一切世善皆成無漏。不發菩提心雖修五度総属有漏。

○辨曰

世善之与出世善。廻向之為往生之業。則違佛願故可廢。不廻向之。何用廢。

○仁者曰

第十號所説。盡是雜行雜修。前文何以力掃諸行。豈所掃者是出世行。而不掃者是世間行乎。夫世間行長生死業。而出世行逆生死流。正孰反。必有能辨之者。

之れを回向せざれば、則ち雜行雜修の名を得ず。五倫五常の人生は之れ必ず由る所なり。而れば寸刻も之を欠くべからず。本宗は之れを以て往生の因と為さざるなり。吃茶吃飯の如く、豈に之れを以て雜行雜修と為さんや。

○仁者曰はく。

倫常門是れなり。善は世善なれど尚ほ廢せず。何為れぞ偏へに出世の善を廢するや。

〔闡教編『評真宗教旨』〕

一切世の善は均しく菩薩万行中の撰に在り。但し能く浄土に廻向せば則ち往生の業と成る。否な則ち人天に果報し而も已る。菩提心を發こすとは、一切世の善に皆な無漏を成ず。菩提心を發さざるは、五度を修すると雖も総じて有漏に属すなり。

弁じて曰はく。

世の善は、之れ出世の善を与ふ。之れを回向して往生の業と為れば、則ち仏願に違するが故に廢すべし。之れを回向せざれば、何ぞ廢するを用ひんや。

○仁者曰はく。

第十号に説く所は盡く是れ雜行雜修なり。前文は何を以て諸行を力掃するや。豈に掃ふ所の者は是れ出世の行なり。掃はざる者は、是れ世間の行ならんや。夫れ世間の行は生死を長するの業にして、出世の行は生死の流に逆らふ。孰れか正か、孰れか反か。必

○辨曰

第十八願不以諸行為往生之因。單以念仏為因。契願者為正。不契願者為雜。貴君不知其順不順稱不稱。故妄為顛倒之說也。

聖道門以出世善。回向菩提。淨土門之他力出世善尚不廻向。況世善哉。

○仁者曰

支那（華地）時有外道邪宗。秘密傳授。不令他人得知。貴宗卷尾有口授面稟之語。令人見而生疑。似宜編輯成書。入社之人各領一冊以便遵行。

○辨曰

此言得矣。余輩要編輯之。唯此一小冊。示大海之一滴耳。豈得備記日用之行事哉。

論註曰。若必須知。亦有方便。必須口授。不得題之筆點。是非外道邪宗秘密傳授也。鸞師之意皎如明鏡。可知。

ず能く之れを弁する者有り。

弁じて曰はく。

第十八願は諸行を以て往生の因と為さず。單に念仏を以て因と為す。願に契ふ者は正と為す。願に契はざる者は雜と為す。貴君は其の順と不順、稱と不稱を知らざるが故に、妄に顛倒の説を為すなり。

聖道門は出世の善を以て菩提に回向す。淨土門の他力は、出世の善すら尚ほ回向せず。況んや世の善をや。

○仁者曰はく。

支那（華地）時に外道邪宗有り。秘密傳授し、他人をして知ることを得しめず。貴宗の巻尾に口授面稟の語有り<sup>45</sup>。人をして見、而も疑を生ぜしむ。宜しく編輯して書を成じ、入社の人をして各おのの一冊を領せしめ、便を以て遵行すべきに似たり。

弁じて曰はく、

此の言を得る。余輩之れを編輯することを要するは、唯だ此の一小冊は、大海の一滴を示すのみ。豈に日用の行事を備記することを得んや。

論註に曰はく、「若し必ず須く知るべくは、亦た方便有り。必ず須く口授すべし。之れを筆點に題することを得ざれ<sup>46</sup>」。是れは外道邪宗の秘密傳授に非らざるなり。鸞師の意、皎として明鏡の如し。知るべし。

○仁者曰

貴宗所奉者大經第十八願。今先録願文。隨後解釋。經曰。設我得佛十方衆生至心信樂欲生我國乃至十念若不生者不取正覺唯除五逆誹謗正法(文)。此中有乃至二字。可見從七日持名。減至一日。又從一日。減至十念。是最小最促之行也。向下更無可減矣。大經下輩生者。正是此機。其上輩者。是十九願所被之機

○辨曰

從七日持名。減至一日。從一日減至十念。是可也。是最少最促之行也。向下更無可減矣是貴君之知一不知二也。乃至者一多包容之言也。善導曰。上盡一形。下至十聲一聲等。非上盡七日下午至十念也。上盡一形。下至十聲一聲。亦得往生也。又曰。若七日及一日。下至十聲乃至一聲一念等。必得往生。以是觀之。上盡一形。亦可往生。下至十聲一聲一念。亦可往生。何得言十念之外無可減乎。大經下輩生者。正是此機。貴君之眼。未徹紙背也。第十八願。有十念之言。下輩亦有十念之言。然不可輒以此為下輩十念。即十八十念也。

十八之十念。單取念佛。下輩十念。傍取餘行。曰發善

○仁者曰はく。

貴宗の奉する所は、大經の第十八願なり。今先に願文を録す。隨後後に解釋せん。經に曰はく。「設ひ我れ仏を得んに、十方衆生、心を至し信樂して、我國に生まれんと欲ひ、乃至十念せん。若し生まれずんば正覺を取らじ。唯だ五逆と正法を誹謗せんことを除く」(文)。此の中、乃至の二字有り。見るべし。七日の持名從り減して一日に至る。又た一日從り減して十念に至る。是れ最小最促の行なり。下に向て更に減すべきこと無し。大經の下輩生とは、正しく是れ此の機なり。其の上輩とは、是れ十九願所被の機なり。

弁じて曰はく。

七日の持名從り減して一日に至り、一日從り減して十念に至る。是れ可なり。是れ最少最促の行なり。下に向ひて更に減すべきこと無し。是れ貴君の一を知りて二を知らざるなり。乃至とは、一多包容の言なり。善導曰はく。「上一形を尽し」と、「下は十声一聲に至る」(取意)等。上は七日を盡くし下は十念に至るに非らざるなり。上に一形を盡くし、下に十声一念に至るまで、亦た往生を得るなり。又曰はく。「若七日及一日、下は十声乃至一声一念等に至らば、必ず往生を得るなり。是れを以て之れを觀ずれば、上は一形を尽くすも、亦た往生すべし。下に十声一声一念に至るも、亦た往生すべし。何ぞ十念の外、減すべきこと無しと言ふを得んや。

大經の下輩生とは、正に是れ此の機なり。貴君の眼は、未だ紙背に徹せざるなり。第十八願に十念の言有り。下輩も亦た十念の言有り。然に輒く此れを以て下輩の十念と為すべからず。即ち十八の十念なり。

提心。廢此餘行。而單行念佛。始可得与十八念佛同也。

本宗釋三輩菩提心。有二門。一者以為聖道自力之菩提心。是可廢也。第十八願不許自力菩提心故也。二者以為他力之菩提心。第十八之三心是也。三輩之菩提心。即至心信樂欲生也。

(楊文会再駁)

四弘誓如錠子金、三心如葉子金、乃諄諄誨人曰、錠子金不可用、必須用葉子金、豈知錠子金与葉子金、体本無二、用亦無二也。

○辨曰

既以下輩菩提心為三心。則下輩十念。即十八之十念。而可以下輩生。為十八之機也。

本宗以第十八願為真實願。以十九願為方便願。第十八願不許諸行。是為真實。十九願許諸行。是為方便。三輩明十九願之成就也。故說諸行。諸行中之念他(佛)。不  
免帶自力也已帶自力則不可輒判為十八之念佛。

十八の十念は、単に念仏を取るのみ。下輩の十念は、傍に餘行を取り、発菩提心と曰う。此の餘行を廢して単に念仏を行じて、始めて十八の念仏と同じことを得べきなり。

本宗は三輩の菩提心を積するに二門有り。一には以て聖道自力の菩提心と為す。是れ廢すべきなり。第十八願は自力の菩提心を許さざるが故なり。二には以て他力の菩提心と為す。第十八の三心は是れなり。三輩の菩提心、即ち至心信樂欲生なり。

(楊文会再駁)

四弘誓は錠子金の如し、三心は葉子金の如し。乃ち諄諄として人に誨えて曰はく、錠子金を用ひるべからず、必ず須く葉子金を用ひるべし。豈に錠子金と葉子金と、体本と無二にして、用も亦た無二なるを知らんや。

弁じて曰はく。

既以下輩の菩提心を以て三心と為す。則ち下輩の十念は、即ち十八の十念なり。而して下輩の生を以て、十八の機と為すべきなり。

本宗は第十八願を以て真實の願と為し、十九願を以て方便の願と為す。第十八願は諸行を許さず。是れを真實と為す。十九願は諸行を許す。是れを方便と為す。三輩は十九願の成就を明かすなり。故に諸行を説き、諸行中の念他(仏)は自力を帶するを免れざるなり。已に自力を帶すれば、則ち輒く判じて十八の念仏と為すべからず。

(楊文会再駁)

第十八願既為真實、佛又何故要說十九願之方便、令人捨易而行難、既往生而更須轉進方入十八之真實也。若方便易而真實難、佛則令人從易進難、豈有從難進易以為方便乎。總之、以立異為高、不立異不足以動人也。

○辨曰

本宗以輩品。為開合之異。三輩已說諸行。九品亦說諸行。以三輩為十九成就。則九品亦不能免為十九之相也。

要之觀經序正開十九願也。至流通而廢諸行單屬念佛。

始与第十八同其歸也。貴君之眼未能徹其紙背。一片之婆心。促君反省。

其上輩者。是十九願所被之機。是亦未徹紙背也。舉上中下。皆是十九願所被也。十九願許諸行。非彌陀本意也。觀經付屬之(釋)。瞭然明矣。三輩皆許諸行。何單以上輩屬十九哉。

(楊文会再駁)

第十八願は既に真實為れば、仏又た何故にして要す十九願の方便を説かん。人をして易を捨て難を行しむるや。既に往生して更に転進を須ちて、方に十八の真實に入るなり。若し方便は易く真實は難なれば、仏は則ち人易に従い難に進ましめ、豈に難に従り易に進み、以て方便と為すこと有らんや。之れを総じて、異を立てるを以て高と為す。異を立てざれば、以て人を動かすに足らざるなり。

弁じて曰はく。

本宗は輩品を以て開合の異と為す。三輩は已に諸行を説く。九品も亦た諸行を説く。三輩を以て十九の成就と為せば、則ち九品も亦た十九の相と為るを免がる能はざるなり。

之を要するに觀經の序・正は十九願を開くなり。流通に至りて諸行を廢し、単に念仏に属し、始めて第十八と其の歸を同じくするなり。貴君の眼は、未だ其の紙背に徹すること能はず。一片の婆心、君が反省を促す。

其上輩は、是れ十九願の所被の機、是れ亦た未だ紙背に徹せざるなり。上中下を挙げて、皆な是れ十九願の所被なり。十九願は諸行を許す。彌陀の本意に非らざるなり。觀經付屬の(釈)、瞭然として明なり。三輩は皆な諸行を許す。何ぞ単へに上輩を以て十九に属せんや。

(楊文会再駁)

尊目力徹紙背、所以能作反語。拙目不徹紙背、故祇能作正語。古人云、依文解義、三世佛冤、離經一字、即同魔說。彼此各坐一辺病、若二辺不著、則無病。

(既非本意何得發此一願。豈非違心之願乎。此等判斷實屬膽大有識者決不敢出此悟)

《謹案此條評本末錄茲依手稿增入編者識》

○仁者曰

今日、十八願為正定聚、十九願為邪定聚、此即大違經意。十八願末言五逆謗法、不得往生。凡与經意相違者、均是謗法。觀經下品下生、十惡五逆回心即生、未収謗法。蓋謗法者与彌陀願光相背也。今判十八願所被之機、生真實報土、十九之機、止至化土、此等抑揚、未知何所依拠、請將經文確証、一一指出、以釋群疑。

○辨曰

各宗祖師之開一宗、出於其法眼之所照、豈尋常膚淺之

訳註『真宗教旨陽駁陰資弁』

(楊文会再駁)

尊目の力は紙背に徹す。能く反語を作す所以なり。拙目は不紙背に徹せず、故に祇かに能く正語を作す。古人云く、文に依り義を解すは、三世の仏を冤すなり。經を離れた一字は、即ち魔說に同じなり。彼此各坐一辺に座すれば、病むなり、若し二辺に著せざれば、則ち病無きなり。

(既に本意に非ざるに何ら此の一願を發こすを得るや。豈に違心の願非ざるや。此等は實に膽大有識者に属すると判断し、敢えて此の悟を出さざると決すなり)

《謹んで案ずるに、此の條の本末を評して茲れを録して、手稿に依りて増入す。編者識す》<sup>49</sup>

○仁者曰はく。

今日はく。十八願を正定聚と為し、十九願を邪定聚と為す。此れ即ち大に經意に違す。十八願の末に五逆謗法は往生を得ずと言ふ。凡そ經意と相違するとは、均く是れ謗法なり。觀經の下品下生・十惡五逆は、回心して即ち生ずるなり。未だ謗法を収めず。蓋し謗法は弥陀の願光と相背するなり。今、十八願の所被の機を判じて、真實報土に生ずるとす。十九の機は、化土に至るに止まる。此等の抑揚は、未だ何をか依拠する所なるを知らず。請ふ、經文の確証を將て、一々指出して以て群疑を積さんことを。

弁じて曰わく

各宗の祖師の一宗を開くは、其の法眼の照される所に出づ。豈に尋常膚淺の窺知せら

所窺知哉。慈恩之立法相宗、以有空二教、為不了義教、以深密等為中道了義教他宗豈許之哉。然以慈恩之見、則不得不然也。

天台之立一宗、以爾前之經為方便教、單以法華涅槃為真實教、他宗豈許之。然以四十餘年未顯真實、則不得不然也。密教祖師弘法大師、開真言宗、以顯經為妄言、單以金胎兩部為真實語、他宗豈許之哉。

然以密眼判之、不得不然也。

見真大師之開淨土真宗、以法然上人為師、法然依善導立一宗。善導作觀經疏、楷定古今之誤、法然之眼、深知其意之所在。断断乎立念佛一宗、使末代衆生入念佛往生之門。嗚呼深仁厚沢、拳天下後世、可不謝其恩乎。

善導五部九卷並明觀佛念佛、使初心不知其所歸、法然探知其意所在、筆之於文章、使天下万世知唯念佛之可依焉。

(楊文会再駁)

此是不滿善導之処、証知法然併非全宗善導、乃取善導之片言而文飾之耳。

れる所ならんや。慈恩之れ法相宗を立つる。有空二教を以て、不了義教と為す、深密等を以て中道了義教と為す。他宗は豈に之を許さんや。然れども慈恩の見を以てすれば、則ち然らざるを得ざるなり。

天台之れ一宗を立つる。爾前の經を以て方便教と為す。單に法華涅槃を以て真實教と為す。他宗は豈に之を許さんや。然れば四十餘年、未だ真實を顯さざるを以てすれば、則ち然らざるを得ざるなり。密教の祖師弘法大師は、真言宗を開く。顯經を以て妄言と為す、單に金胎兩部を以て真實語と為す、他宗は豈に之を許さんや。

然れば密眼を以て之れを判せば、然らざるを得ざるなり。

見真大師は之れ淨土真宗を開く、法然上人を以て師と為す、法然は善導に依り一宗を立つる。善導は觀經の疏を作り、古今の誤を楷定す。法然の眼は、深く其意の所在を知る。断断乎して念仏の一宗を立つる、末代の衆生をして念仏往生の門に入らしむ。嗚呼、深仁厚沢なり。天下後世を挙げ、其の恩を謝せざるべけんや。

善導の五部九卷<sup>⑩</sup>は觀仏念仏を並べ明かし、初心をして其の歸する所を知らざらしめ、法然は其の意の在る所を探り、之の文章に筆して、天下万世をして唯念仏の依るべきを知らしむなり。

(楊文会再駁)

此れは是れ善導の所を満たさず、法然を証知す、併し全く善導を宗とするに非ず、乃ち善導の片言を取りて而も之を文飾するのみなり。



○辨曰

善導曰、一心專念弥陀名号、是名正定之業、順彼佛願故。又曰、雜行雜修、千中無一、專修專念、百即百生。又曰、上來雖說定散兩門之益、望佛本願、意在衆生一向專稱弥陀佛名第十八願、不許諸行、唯以念佛為正因、順此願者、百即百生。知此善導之意、我法然而已。微法然、則念佛成佛之法門落地。

第十八願之十念、諸師誤為觀念、意念、善導楷定之為口称称名、弥陀本意皎然於天地之間。法然依之、見真依之。膚淺之学、偏見之徒、豈得此至妙之道理哉。

(楊文会再駁)

小弥陀經專主持名、唐以前已盛行矣。(至二千年後、法然始指出哉。)

○辨曰

本宗順本願為正、不順本願為邪也。非三惡為邪也。以三願配三機、如前已說。群疑論二(二紙左)曰、金剛般若經曰、若以色見我、以音声求我、是人行邪道不能見如来、如何今日作有相觀佛行於邪道而願往生。釋曰、般若

訳註『真宗教旨陽駁陰資弁』

弁じて曰はく

善導曰はく、「一心に専ら弥陀名号を念ず、是れを正定之業と名づく、彼の仏願に順ずるが故に」と。又曰はく「雜行雜修、千中に一無し。專修專念、百即百生なり」と。又曰はく「上來定散兩門の益を説くと雖も、仏の本願を望むれば、意、衆生をして一向に専ら弥陀仏の名を称せしむるに在り」と。第十八願は、諸行を許さず、唯だ念仏を以て正因と為す、此の願に順ずるとは、百即百生なり。此の善導の意を知るは、我が法然のみ。法然微かりせば、則ち念仏成仏の法門は地に落ちるなり。

第十八願の十念を、諸師は誤りて觀念意念と為す、善導は之を楷定して口称称名と為す。弥陀の本意は天地の間に於いて皎然なり。法然之に依り、見真之に依る。膚淺の学、偏見の徒、豈に此の至妙の道理を得んや。

(楊文会再駁)

小弥陀經は専ら持名を主とする、唐以前已に盛んに行ずるや。《豈に二千年後、法然始て指出するや》

弁じて曰はく

本宗は本願に順ずるを正と為し、本願に順ぜざるを邪となすなり。三惡を邪と為るに非らざるなり。三願を以て三機に配す。前に已に説くが如し。群疑論二(二紙左)に曰はく「金剛般若經に曰はく、若し色を以て我を見、音声を以て我を求めば、是の人は邪道を行じて、如来を見ること能はず。如何ぞ今日有相の觀仏を作し、邪道を行じて往生



觀經俱是聖敎、相無相並非凡言、互說是邪、深有旨趣、不可依其般若毀彼觀經。今以十九願為邪、依其行諸行也。善導散善義、以別解別行、喻之群賊、拋其以諸行障往生之行也。別解別行、是係聖道門、豈是賊耶、今以妨害念佛、貶之為賊耳。君其思之。

### （楊文会再駁）

經中以諸行資助往生、斷無障往生之理。善導所說。別解所行。退失往生之業者。喻之群賊。若以菩提心及諸功德。喻之群賊。則本疏中自語相違矣。

### 《楊氏附記》

嘗憶十年前、上海傳敎西人、引我至講堂、有本國演敎者大声宣言曰、基督教如早日之光、儒釋道等敎、或如星月之光、或如流螢之光、早日一出、諸光皆隱。君何不捨佛敎而歸我基督教乎。予笑而不答、知其不可與言也。孔子云、可與言而不與之言、失人。不可與言而與之言、失言。嘗見貴宗諸君子藹然可親、謂其可與言也。今閱弁答

を願するや。釋して曰はく、般若と觀經とは俱に是れ聖敎なり、相と無相（の觀）は並に凡の言に非ず、互に是れ邪を説くこと深き旨趣有り。其の般若に依って彼の觀經を毀るべからず」と。今十九願を以て邪と為す、其の諸行を行するに依るなり。善導の散善義は、別解別行を以て、之を群賊に喩ふるは、其の諸行を以て、往生の行を障ふるに依るなり。別解別行は、是れ聖道門に係はり、豈に是れ賊ならん。今念仏を妨害するを以て、これを貶して賊と為すのみ。君其れ之を思え。

### （楊文会再駁）

經中に諸行を以て往生を資助す、斷じて往生の理を障ぐる無し。善導の説く所の別解別行は、往生の業を退失するとは、之を群賊に喩う。若し菩提心を及び諸の功德を以て之を群賊に喩ふれば、則ち本疏の中の自語相違なす。

### 《楊氏附記》

嘗て憶う、十年前、上海傳敎の西人、我を引きて講堂に至らしむ、本國の演敎者有りて大声に宣言して曰はく、基督教、早日の光の如し。儒釋道等の敎は、或は星月の光の如し。或は流螢の光の如し。早日一たび出づれば、諸光皆な隱る。君何ぞ仏敎を捨て、我が基督教に歸せざるや。予笑して而も答えず。其れ与に言うべからざるを知るなり。孔子云はく、「与に言うべくして之を与に言わざれば人を失う。与に言うべからずして之を与に言えば言を失う」と。嘗て貴宗の諸の君子の藹然として親しむべきを見、

之辞、祇樹自宗之門庭、不領佛經之意旨、前此一番狼藉、豈非墮失言之過乎。

其れ与に言うべしと謂えり。今、答弁の辞を閲するに、祇だ自宗の門庭を樹て、仏經の意旨を領さず。此の前に一番の狼藉、豈に失言の過に墮するに非ざるや。

仁山居士固執入骨、不可教訓。其返駁往往發粗惡語、已至此極、則不必再三答辨而可也

《仁山居士固執して骨に入る。教訓すべからず。其れ返駁往往にして粗惡の語を發す。已に此の極に至れば、則ち必しも再三答弁せずも可なり》

憲白。

憲白。

註

- (1) 西洋諸国を意味する。
- (2) この文は大谷大学本にはないが、闍教編『評真宗教旨』により附加した。以下同じく闍教編『評真宗教旨』の文は大谷大学本にはないが、今すべて附加した。
- (3) 『大無量寿経』『真聖全』一・一五『大正蔵』一二・二六九c。
- (4) 『観無量寿経』『真聖全』一・六一『大正蔵』一二・三四五a。
- (5) 《》文は、闍教編『評小栗栖陽駁陰資弁』にはない。
- (6) 黄衣派 身分の高い天子・僧侶。
- (7) 青衣 身分の低い庶民・僧分。
- (8) 越の人は遠く離れている秦の人の肥瘠を見ても何とも思わない。つまり、関係のない者は、何とも意に介しないことの譬え。韓愈『浄臣論』(若越人人之視秦人之肥瘠)。
- (9) 《》文は、闍教編『評小栗栖陽駁陰資弁』にはない。
- (10) 芻僂謙遜の意。
- (11) 『十住毘婆沙論』『易行品』。『真聖全』一・二五三〜二五四。『大正蔵』二六・四一b。
- (12) 《》文は、闍教編『評小栗栖陽駁陰資弁』にはない。
- (13) 《》文は、闍教編『評小栗栖陽駁陰資弁』にはない。
- (14) 剩の字、著作集では贅とある。
- (15) 《》文は、闍教編『評小栗栖陽駁陰資弁』にはない。
- (16) 事を曖昧にして是非を決しないこと。
- (17) 《》文は、谷大本にはないが、闍教編『評小栗栖陽駁陰資弁』により附加した。
- (18) この(闍教編『評小栗栖陽駁陰資弁』)の文は大谷大学本にはないが、今附加した。
- (19) 『安樂集』『第二大門』。『真聖全』一・三九五。『大正蔵』四七・九b。
- (20) 『安樂集』『第三大門』の取意文。『真聖全』一・四一〇。『大正蔵』四七・一三c。
- (21) 善導は流通分において「上来定散両門の益を説くと雖も、仏の本願の意を望まんには衆生をして一向に専ら弥陀の名号を称するに在り」と述べ、称名念仏一行に帰すことを記している。『真聖全』一・五五八。
- (22) 『大無量寿経』『真聖全』一・七。『大正蔵』一二・二六七b。
- (23) 『大無量寿経』『真聖全』一・一五。『大正蔵』一二・二六九c。
- (24) 四法は教行信証、三願は十七・十八・十一願を意味する。山辺習字・赤沼智善『教行信証講義 信証の巻』(法蔵館)一〇〇五〜一〇〇六を参照。
- (25) 谷大本では三輪とあるが、三論に訂正した。
- (26) 『大無量寿経』『真聖全』一・四。『大正蔵』一二・二六六c。
- (27) 以上の三願は『真聖全』一・九。『大正蔵』一二・二六六a。
- (28) 『大無量寿経』『真聖全』一・二四。『大正蔵』一二・二七二b。
- (29) 『観経疏』「散善義」。『真聖全』一・五三八。『大正蔵』三七・二七二b。
- (30) 『十住毘婆沙論』『易行品』『真聖全』一・二六〇。『大正蔵』二六・四三a。
- (31) 著作集では、領の字が願とある。
- (32) 《》の文は、谷大本にはないが、闍教編『評小栗栖陽駁陰資弁』により附加した。
- (33) 『観経疏』「玄義分」。『真聖全』一・四四六。『大正蔵』三七・二四七a。
- (34) 『観経疏』「玄義分」。『真聖全』一・四四六。『大正蔵』三七・二四七a。
- (35) 『観経疏』「玄義分」。『真聖全』一・四四三。『大正蔵』三七・二四六b。
- (36) 《》の文は、谷大本にはないが、闍教編『評小栗栖陽駁陰資弁』により附加した。
- (37) 『大無量寿経』第十八願文。『真聖全』一・九。『大正蔵』一二・二六八a。
- (38) 『観経疏』「散善義」。『真聖全』一・五三四。『大正蔵』三七・二七一b。
- (39) 『観経疏』「玄義分」。『真聖全』一・四五九。『大正蔵』三七・二五一

- (40) 『觀經疏』「玄義分」。『真聖全』一・四四三。『大正藏』三七・二四六 a。  
 b. 『觀經疏』「散善義」。『真聖全』一・五三八。『大正藏』三七・二七二。
- (41) 七祖の中に全く同様の文を見ることはできない。ただ、曇鸞『浄土論註』上卷に「仏の名号を以て經の体と為す」とあり、これの取意文と考えられる。『真聖全』一・二七九。『大正藏』四〇・八二六 b。
- (42) 『觀經疏』「定善義」地相觀。『真聖全』一・五〇八。『大正藏』三七・二六四 a。
- (43) 『十住毘婆沙論』「易行品」。『真聖全』一・二六〇～二六一。『大正藏』二六・四三 b。
- (44) 『觀經疏』「散善義」。『真聖全』一・五三八。『大正藏』三七・二七二 b。
- (45) 『浄土論註』上卷の末尾に「必ず口授すべし」とある。『真聖全』一・三一一。『大正藏』四〇・八三四 c。
- (46) 『浄土論註』『真聖全』一・三一一。『大正藏』四〇・八三四 c。
- (47) 『大無量寿經』第十八願文。『真聖全』一・九。『大正藏』一一・二六八 a。
- (48) 以下の文『往生礼讚』「前序」の取意文。『真聖全』一・六五一。『大正藏』四七・四三九 b。
- (49) ( ) 《 》の文は谷大本にはないが、闍教編『評小栗栖陽駁陰資弁』にあるので附加した。
- (50) 五部九卷とは、善導の著作の総称で、『觀經疏』一部四卷・『法事讚』一部二卷・『觀念法門』・『往生礼讚』・『般舟讚』を合わせて五部九卷という。
- (51) 『觀經疏』「散善義」。『真聖全』一・五三八。『大正藏』三七・二七二 b。
- (52) 『往生礼讚』前序に「ただ意を專にして作さしむれば、十は即ち十ながら生ず。雜を修するは至心ならざれば、千が中に一も無し」とある。〔『真聖全』一・六五二。『大正藏』四七・四三九 b〕。更に法然は、善導の文を受けて『選択集』「二行章」の末尾に「雜を捨てて專を修すべく、あに百即百生の專修正行を捨てて、堅く千中無一の雜

- (53) 修雜行を執せんや」とある。〔『真聖全』一・九四〇。『大正藏』八三・四 b〕。
- (54) 『觀經疏』「散善義」。『真聖全』一・五五八。『大正藏』三七・二七八 a。  
 a. 《 》の文は、谷大本にはないが、闍教編『評小栗栖陽駁陰資弁』にあるので附加した。
- (55) 『釈浄土群疑論』『大正藏』四七・三七 b。
- (56) 『觀經疏』「散善義」二河譬。『真聖全』一・五四一。『大正藏』三七・二七二 a。
- (57) 孔子『論語』に「子曰、可與言、而不與言、失人、不可與言、而與之言、失言、知者不失人、亦不失言」とある。〔中国古典文学大系三『論語』木村英一・鈴木喜一訳〕八四。